

報告者名	俵木 悟	被調査者生年	なし
調査者名	俵木 悟	被調査者属性	なし
補助調査者	大沼 知	(参与観察調査のため被調査者の情報なし)	

この日は特定の話者への聞き取りではなく、月浜地区の復興に関わる取り組みの参与観察を行った。

観光業の復興の取り組み

月浜地区を中心とする、宮戸島の民宿経営者らが組織する「奥松島体験ネットワーク」は、農水省の「食と地域の絆づくり被災地緊急支援事業」に、観光と連携した都市農村交流の推進の取り組みとして採択され、今年度より本格的な観光再生に着手している。夏休み期間中(7月28日～8月26日)は、「奥松島体験観光復活企画 夏の元気フェア」と題して、とくに子どもたちを対象にした観光メニューを月浜海岸を中心に提供していた。主なメニューとしては、①カヌー体験、②操船体験／遊覧船(嵯峨溪巡り)、③漁業体験(かご漁等)、④バーベキュー、⑤バナナボート試乗会などであった。

調査当日は、KHB 東日本放送の特別番組「宮城のチカラ:未来に花を咲かせましょう SP」の取材が入っており、調査者らもこれに同行して体験メニューのいくつかを観察しながら、話しを聞かせてもらった。

嵯峨溪巡りの遊覧船は、実際には月浜の漁業者が所有する小型漁船である。松島などから大型の観光遊覧船も出ているが、この船の方が岩崖により近づけて迫力があるということであった。日本三大溪の一つにも数えられる嵯峨溪は、その景観自体が震災によって大きく変化してしまった。奇岩として知られるめがね岩は上部が震災によって完全に崩落していたり、岩の上に生える松が津波によってなぎ倒されていたりするが、その変化についても船頭が解説してくれた。

かご漁体験は、あらかじめ仕掛けておいたかご網で魚介類を捕り、それを浜にもどってバーベキューで食べられるのが売りであるという。この船を運転して案内するのも奥松島体験ネットワークに所属する地区の民宿経営者らである。かご漁は、もとは民宿で宿泊客に出す食材を採るために行われていた漁法である。

海水浴場である海岸は、今年3月以来、HONDAのビーチクリーン・ボランティアが入っており、美しく整備されていた。



写真1 奥松島体験ネットワークの事務所



写真2 かご網漁体験の様子

のり養殖業復興の取り組み

月浜において海苔養殖は、民宿経営とならぶ主要産業であった。従来の海苔養殖業は主として個人（家）経営で、家ごとに加工場を設けていた。これらの設備は津波によってすべて流されてしまった。

2011 年中に海苔養殖業者の 7 経営体 8 人（現在は 6 経営体 7 名）が参加して、「奥松島月浜海苔生産グループ月光」が設立され、協業化・法人化しての復興を目指している。今年 8 月からは宮城県南部地域養殖復興プロジェクト内の宮戸西部支所ノリ部会（月光）として、水産庁の「がんばる養殖復興支援事業」に認定され、海苔加工施設や乾燥機を共同利用するかたちでの復興に着手している。調査時点では、海苔加工施設の建屋が建築中で、今年中の操業再開に向けて養殖筏の整備などを行っていた。

月光の活動には、これまでも多くのボランティアが参加してきた。このボランティア参加は、トヨタ財団の 2011 年度地域社会プログラム助成事業（東日本大震災対応特定課題）の支援を受けて実施されており、海苔生産の準備を手伝うのと合わせて、営業再開した民宿などに宿泊してもらい、地域との関係をつくり、将来的に海苔製品や観光の消費に繋げたいというねらいがあるという。ただし、調査時点では規模の大きな団体の受け入れなどは難しく、近隣に宿泊するケースが多いという。

調査日には、山形県に本社をおく旅行業者のボランティア・ツアーで、東京の大学の職員のグループが参加しており、宮戸西部漁協の倉庫で海苔簀を金属製の枠にはめる作業を行っていた。この旅行会社では現在、週に 1 度ほど月光に支援ボランティアのツアーを紹介しているという。このようなボランティア・ツアーは、震災直後に比べると数は減ったものの、いまでもそれなりの需要があるという。



写真 3 ボランティア参加者に作業の説明をする月浜海苔生産グループ月光の代表者



写真 4 ボランティア作業の様子